

現代メラネシアの「海の民」における居住と移住  
——ソロモン諸島マライタ島北部のラウ／アシとその人工島をめぐる——  
里見 龍樹 (東京大学大学院総合文化研究科)

1. はじめに

対象社会を地理的に固定され境界付けられた集団として規定してきた文化人類学の古典的な想定が批判されるにともない、人の移動や居住、あるいはより一般的に場所・空間といった主題は現代の人類学において基本的な位置を占めるに至っているが、これらの主題に関し、場所や景観の象徴的重要性や、社会組織・リーダーシップにとっての人の移動の構成的意義に早くから注目してきたオセアニア人類学は、一面でたしかに先駆的な立場を占めてきたと言ってよいだろう。本稿は、これら人の移動や居住、場所経験といった主題に取り組む上できわめて示唆に富むと思われる、メラネシア、ソロモン諸島マライタ島 Malaita Is. の北東部で独自の海上居住を営む「海の民」ラウ Lau またはアシ Asi と呼ばれる人々の事例について、現地調査に基づく基本的な事実を報告し、今後の議論・研究に資することを旨とするものである<sup>1</sup>。

2. ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民」ラウ／アシと人工島

10～12の異なる言語集団が存在するとされるマライタ島には、現在約12.2万人（1999年時点、Statistics Office c.2000）が居住しているが、とくに人口密度の高い同島北部の人々は伝統的に、居住地と生業のおおよその相違に基づき、自他を「山の民 *Too i tolo*」と「海の民 *Too i asi*」に区別することで知られてきた (Ivens 1978 (1930)、Ross 1973)。通常、それぞれ単に「山地／海」を意味する「トロ Tolo／アシ Asi」という表現で指示されるこれらの集団の間では、「海の民」が獲得する魚が「山の民」のイモ類と交換される市場交易が長期に渡って行われてきたとされるが (Ross 1978)、本稿で取り上げるのは、マライタ島中西岸の集団ランガランガ Langalanga と並び代表的・典型的な「海の民」とみなされる、従来の文献で「ラウ」と呼ばれてきた同島北東岸および海上に居住する人々である<sup>2</sup>。

マライタ島北部の「ラウ」の人々は、ランガランガと並び、これまで「人工島 artificial islands」として紹介されてきた独特な居住形態をもつことで知られている。マライタ島北東岸には、今日ラウ・ラグーン Lau Lagoon と呼ばれるサンゴ礁が南北30km

---

<sup>1</sup> 本稿のもとになったソロモン諸島国での調査は、2008年3月、2008年8月～2009年1月、2009年4月～10月の合計約11.5か月（うち、マライタ島のみで約10か月）に渡って行った。なお、本稿での現地語のアルファベット表記は、Fox 1974 に基本的に従いつつ、煩雑な記号表記を避けるため長母音を *aa*、*oo* というように母音を2つ重ねて表すという変更を加えた。

<sup>2</sup> トライオンとハックマンは、マライタ島南部の「飛び地」も含めた「ラウ語」の話者数を6500人と推定している (Tryon & Hackman 1983: 21)。他方、ソロモン諸島国の国勢調査には「ラウ」という独立の地域区分が存在せず、現在の人口は特定しがたい。

以上に渡って細長く発達しているが、「ラウ」の人々は、このサンゴ礁内の浅い海に、海底から採取される岩石状のサンゴの碎片——現地語で *fou i asi*「海の岩」と呼ばれる——を無数に積み上げて人工の島を築き、その上に住居などを建てて居住することを現在まで続けている。現地語では *fera i asi*「海の村、海にある住みか」と呼ばれるこうした人工島は<sup>3</sup>、いわゆるラウ・ラグーンの南端から北端まで広く、ただし決して均等ではなく分布しており、最古のものは18世紀あるいはそれ以前の建設と推定される一方で<sup>4</sup>、現在でも新たなものが建設されている。今日の人工島は、大きなものには数百人、小さなものにはわずか1家族のみが居住するというようにさまざまな規模をもち、また一部は放棄され無人化している。2009年9月時点で筆者が試みた計数によれば、アシ地域には約94の人工島が現存し、うち有人のものが79、無人のものが15である。

こうした特徴的な居住形態をもつ「ラウ」の人々に関しては、これまで、英国国教会の宣教師らに同行したオーストラリア人研究者アイヴェンズによる1930年の報告 (Ivens 1978 (1930)) の後、主に60年代末の滞在・調査に基づくP. マランダとE. ケングス＝マランダの一連の象徴人類学的な研究 (Köngäs Maranda 1970、Maranda & Köngäs Maranda 1970、Maranda 2001など)、加えて秋道智彌による、70年代半ばと90年代初頭の調査に基づく生態人類学的な研究 (秋道 1976、Akimichi 1991など) があるほか、竹川大介により、マライタ島南部に「飛び地」のように存在する「ラウ語」話者の居住地について調査・研究が行われている (竹川 1995、竹川 2002など)。

なお、狭小な地域に複数の言語集団が居住するマライタ島北部の集団間関係は複雑であり、集団範疇の問題に限っても、これまでの文献で「ラウ」と呼ばれてきた「海の民」の居住地域は「ラウ」と「アラー 'Alaa」——それぞれ「北」と「南」を意味する——に二分され、両地域の方言ははっきりと異質であるとされる (後述する筆者の調査地は「ラウ」の地域に当たる)。他方、従来の文献で「ラウ」と呼ばれてきた人々の、マライタ島北部における総称としては、上述の通り「海の民」を意味する「アシ」が、自称・他称のいずれの場合でもより一般的であるように思われることから、本稿でも、このマライタ島北部の「海の民」を「アシ」と呼ぶこととする<sup>5</sup>。

### 3. 人工島居住の形成史

先述のアイヴェンズの著作をはじめ、アシの人々の人工島居住に関するこれまでの研究はしばしば、この地域の人々はなぜ、どのようにしてこうした「特殊な」——というのは

---

<sup>3</sup> 人工島居住は動詞的には *too i asi*「海に住む」と表現される。

<sup>4</sup> パーソンソンは、マライタ島北部における最古の人工島の建設を18世紀と推定している (Parsonson 1966: 5)。他方、P. マランダは、おそらく60年代末に現地で収集した系譜に基づき、「ラウ」の人工島建設に600年の歴史があるとしている (Maranda 2001: 96)、こうした推定の信憑性は十分ではない。

<sup>5</sup> 「マライタ島北部の」という限定が明示される限り、同じく「アシ」と呼ばれるランガランガとの混同が生じるおそれはない。

もちろん、「通常の」陸上の村落との対比において——居住形態をとるようになったのかという、言うなれば人工島居住の「起源」の問題に関心を向けてきた。これに対して提示されてきた主な説明は、第一に、ヨーロッパ諸国による植民地化あるいは「平定 pacification」以前のメラネシアで一般的であった集団間闘争における防衛の目的で、第二に、漁撈や交易活動上の便宜のため (Ivens 1978 (1930))、第三に、マラリアを媒介する蚊を逃れるため (Parsonson 1966)、というものである。

人工島という居住形態一般の成立についてのこれらの説明は、そのいずれも、個別の人工島の建設動機として、今日のアシの人々によって語られることがある。しかし、本稿における民族誌的な視点から見ると、そうした「起源」や「動機」と同等かそれ以上に重要なのは、どのような事情からであれいったん成立した人工島という居住形態が、その模倣的な反復と複製を通じて今日見られる「人工島群」へと至っているという過程あるいは事実性それ自体であり、この点については後述する。

さて、先に挙げたアイヴェンズによる1930年の著作には、この人工島という特徴的な居住形態に関して示唆的な事実が見出される。すなわち、この著作には1927年のアシ地域滞在に基づき35個の人工島がそれらの名称とともに列挙されているのだが<sup>6</sup>、すでに挙げた約94という筆者自身の計数とこの35という数とを単純に比較することによって、現在この地域に存在するすべての人工島の3分の2にあたる約60個もが、27年から現在までの間に建設されたものである——逆に、現在存在するもののうち、27年以前に建設されていたのは数の上で3分の1にすぎない——という推定が得られるのである<sup>7</sup>。この事実が注目に値するのは、そこに、一見したところメラネシアの一地域の「奇習」とも思われかねない人工島という居住形態が、労働交易 Labour Trade と通称されるフィジー、クイーンズランドへの移住労働やキリスト教宣教、イギリスによる植民地支配というかたちで西洋世界との接触<sup>8</sup>、さらにはそれを通じた社会的・文化的変容がすでに始まっている20世紀にむしろ拡大している——少なくとも人工島の数の上では——という、意外とも言える事実が含意されているからである。

加えて注目すべきことに、今日に至るアシの人々の人工島居住がこのように比較的近い過去に形成されてきたという事実は、現在でもアシ地域、あるいは一部は首都ホニアラ Honiaraなどソロモン諸島国内の都市部に居住しているアシの人々やその父母、祖父母の世代の体験についての聞き取りを通じ、この居住形態の歴史にある程度アプローチするこ

---

<sup>6</sup> 35個とは、Ivens 1978 (1930): 49で挙げられている33個に、別の箇所 (Ivens 1978 (1930): 26) で言及されている2つの人工島——筆者自身これらを数え入れている——を加えた数である。

<sup>7</sup> すぐ後で紹介する筆者の調査地の人工島群に関する限り、こうした推定を否定するような情報はこれまでのところ得られていない。なおパーソンソンは、1966年の時点で、アイヴェンズの列挙の約2倍に当たる60以上の人工島が存在していると述べている (Parsonson 1966: 5)。

<sup>8</sup> アシ地域での労働交易は、クイーンズランド行き船舶 *Bobtail Nag* が同地域を訪れた1875年に事実上始まるとされる (Corris 1973: 32)。また、マライタ島に植民地行政府が置かれたのは1909年のことである (Keesing & Corris 1980: 41)。

とができるということをも意味している。次に述べる調査地、T村とその沖合に広がる人工島群での筆者の調査は、まさしくこうした認識に基づいて行われたものである。

#### 4. 調査地：T村と沖合人工島群

T村は、マライタ島北部をほぼ海岸に沿って走る自動車道を、マライタ州の州都アウキ Auki から乗り合いトラックで約4時間——走行距離にして約100km——走ったところに位置する、人工島ではなくマライタ本島の海岸部の村落である。この村はアシ地域北端近くに位置し、村の西側（内陸側）は、「山の民」（トロ）の居住地、具体的にはいわゆるバエレレア Baelelea 語（あるいは方言）地域に接している。

T村は、住居と人口の密集度の高い、周辺地域の基準からすれば大きな集落で、中心部には約40世帯260人の人々が、多くの場合サゴヤシ *hao* の葉を編んで屋根や壁を作る伝統的な家屋を構えて居住している。T村のこうした規模は、この村が1935年以来、カトリック教会の拠点（parish station）として、司祭が常駐する教会や学校、診療所を備えてきたことと関連しているが<sup>9</sup>、ただし、教会が位置している部分も含め、T村の土地は現在でも単一の親族集団——アシの言語で *'ae bara* と呼ばれる、さしあたり父系出自集団と呼ぶことのできる集団——の慣習的保有下にある。また、現在見られるようなT村の集落は、教会が置かれた35年前後にはなく、後述するような事情によって70年代後半以降に形成されたものと考えられる。

このT村の沖合には、調査時点で16個の人工島が現存しており、うち10個には現在でも人々が居住し、他方6個は無人工化している。有人の10個の人工島の現住人口は合計約190人で、それらのうち大きなものでも居住者は30～40人程度と、いずれもアシ地域全体の基準からして中～小規模な部類に属する。T村沖合の人工島居住者たちは、本島との間——最大でも500m程度——を日常的に行き来しながら生活しているが、こうした移動には *ola* と呼ばれる刳り舟式のカヌーが一般に用いられている。本島とのこうした行き来は、T村に多くの親族が居住し、また教会や学校、診療所が存在することと並んで、人工島居住者たちも本島に耕地——アシの言語において、「耕地、畑」と「陸地、本島」は同じ *hara* という語で表される——をもっていることによる。

なお、既存の文献から得られる、専門的な性格の強い漁撈・交易民としてのラウ／アシという印象に対し、T村と沖合人工島群の現状においては、サツマイモを中心とする自給的農耕が、人々の意識においても労働時間などの実態においても重要な位置を占め、自家消費用および近隣地域やアウキ、ホニアラの市場での販売を通じた現金収入目的の漁撈や小規模な市場活動と、集落内および各世帯内で併存・混合している。漁法に関しては、とくに販売目的の場合、かつて主流であったとされる網漁ではなく、特殊な灯油ランプを用

---

<sup>9</sup> マライタ島におけるカトリック宣教は、フランスのマリスト Marist 会が1912年、同島南部のロヒナリ Rohinariに最初の宣教拠点を築いたことに始まる（Laracy 1976）。

いた個人単位での夜間の潜水漁が支配的になっており、また漁撈への経済的な依存度は世帯によって大きく異なる。

## 5. 事例：a 島

現在のアシ地域における人工島、とくにT村沖合に見られるような相対的に新しく小さなその現状をより具体的に見るため、ここで調査地からa 島という事例を紹介したい。a 島は、T村沖合の16個のうちでも本島のT村中心部にもっとも近接した島のひとつであり、干潮時には、カヌーに乗らなくても干上がった海底を歩いて行き来することができるほどである。a 島は人的にも現在のT村と関係が深く、このことは、T村中心部の約40世帯のうち10世帯がa 島のもと居住者またはその子を含むという事実にも見て取ることができる。

a 島は、後述するように、父系出自集団Gの成員である一人の男性のイニシアティブによって1890年代に創設されたものと推定され、現在の主な居住者は、この創始者を含め同島居住者の第四世代に当たる（現在a 島に住む成人男性は、いずれも同島創始者と同じ集団Gの成員である）。現在の居住者数は6世帯30人程度で、そのうち成人の男女は12人程度に過ぎないが、他方過去には最大で10世帯60～70人あるいはそれ以上が居住していた——具体的には1950～60年代頃——ものと推定される。

ところで、すでに述べたように現在T村沖では6つの人工島が無人になっているが、聞き取りを通じ、このことが、60年代後半以降、とくに70年代後半から80年代後半にかけて進展した、沖合人工島群から本島への漸進的な移住の結果であることが明らかになった。人々によればこの移住は、この時期、3つの大きなサイクロンによって人工島上の住居や島自体が損壊したことを契機とするものであり、現在見られるようなT村の集落も、沖合人工島群からのこうした移住によって成立したものと考えられる。a 島もこうした人口流出によって80年前後に一時無人の状態になったとされるが、80年代半ば以降再び人が住み始め、居住者の部分的な交替を経つつも現在に至っている。

現在のa 島の空間構成を図示すると、おおよそ図1のようになる。a 島は丸木橋で結ばれた3つの部分に分かれているが、2つの小さな島は後から造り足されたものであり、ひとつはおそらく60年代に、他方は2000年代に入ってから建設されたものである。大きな島の中心部には、親族の集まりなどの際に使うことができる芝生の広場があるが、人工島上のこうした共用の広場は一般に *labata* と呼ばれ、島の中で最初に建設された部分が後に *labata* とされる場合が多いものと思われる（個別の人工島の建設・増築過程については後述する）。

ところで、キリスト教が一般的に受容される以前のマライタ島北部では、メラネシアの他地域でしばしば見られるように、生活空間、具体的には人工島も含む *fera* すなわち村落空間のジェンダー論的な分割とそれに基づく行動規制が行われていたことが知られている（Maranda & Köngäs Maranda 1970, Ross 1973）。a 島も例外ではなく、既存の文

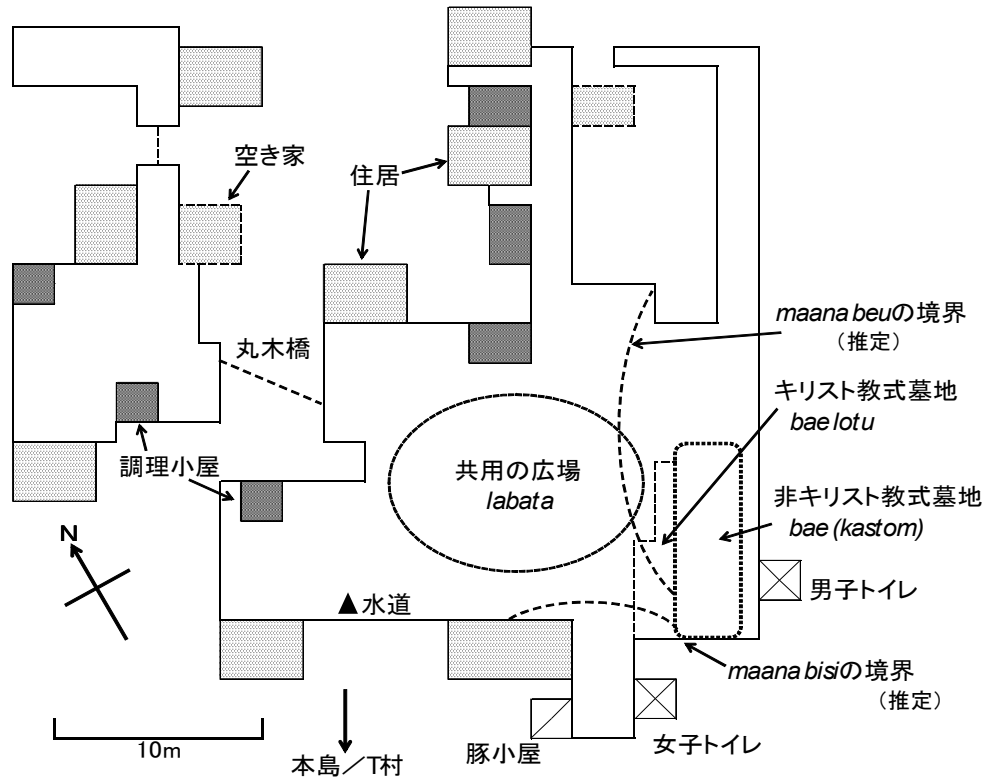


図1 : a 島上の空間構成 (略図)

献に従い図式化すれば、①男性小屋 *beu* の他、祖先崇拜の儀礼 *foa* が行われ墓地としても用いられる *bae* と呼ばれる宗教的領域を含む *maana beu*、②月経や出産の際に女性が隔離される小屋 *bisi* をもつ *maana bisi*、そして③各世帯が住居 *luma* を構え、男女の双方が過ごすことのできる *fera* という異なる3つの領域が存在し、それらの間は「石の壁」*sulu fou* で隔てられていたとされる。こうした空間区分とそれに関連した一連の禁忌は、a 島の場合おおよそ70年代半ばまで行われていたとされ<sup>10</sup>、*maana beu* と *maana bisi* の位置も、聞き取りに基づきおおよそ図のように推定することができるが、現在のa 島にはそれらを画していた石垣もほとんど残っていない。

他方、現在でもa 島上には、本島上に見られるいわゆる「伝統的聖地 *tambu ples*」と同様なこんもりとした茂みのかたちで *bae* が残されている。アシ地域の海をボートで移動していると、しばしば人工島上に大きな樹木の茂みが認められるが、これらはa 島にあるのと同様な *bae* であり、そうした非キリスト教時代の宗教的空間の有無は、人工島の創設の新旧を推定するおおよその手がかりになる。興味深いのは、現在のa 島において図のように、伝統的な宗教空間としての *bae* にぴったりと寄り添うようにしてキリスト教

<sup>10</sup> こうした慣習の放棄は、a島の主な居住集団である集団Gの最後の伝統的祭司 *aarai ni foa* の死没と祖先崇拜の放棄、さらには本島への人口流出と時期的にはば一致している。

式の墓地が造られているという事実である。今日のアシ地域においてはキリスト教式の墓地も *bae* と呼ばれ、区別のためには「キリスト教式の墓地／伝統的な墓地、*bae*」はそれぞれ *bae lotu*／*bae kastom* と呼ばれる。現在の a 島上のキリスト教式墓地には、同島出身の男性のものを中心に19個ほどの墓石が並んでいるが、2つの墓地 *bae* のこうした併存は、この島が通過してきた歴史的な地層をあたかも具現しているかのようである。

## 6. 移住と人工島群の形成過程

ところで、T村沖合に現存する16の人工島のうち、先にも言及した1927年の滞在に基づくアイヴェンズの著作にその名が記載されているのは4つのみであり、このことは、この他の12の人工島が同年以降に建設されたものであることを含意するが、現在および過去におけるこれらの人工島の居住者とその子孫への聞き取りは、創設時期に関するそうした推定をおおよそ支持している。加えて興味深いのは、そうした聞き取りの積み重ねから明らかになるように、個別の人工島がほとんどの場合、それまで別の人工島に住んでいた男性が、その島を出て新たに自分の島を創設するイニシアティブをとるというかたちで創始されているという事実である。

こうした事情のため、T村沖合に見られるような人工島群は、事後的に見て、「中核」となるより古く大規模な人工島から複数の「衛星」が分立し、しばしばその「衛星」からさらに新たな人工島が分立するという反復的な過程を通じて形成されるものとして現れることになる。こうした形成過程は、アシ地域の人工島群の外観上の共通性、具体的には、ひとつまたは2つの大規模人工島があり、その近辺により小規模な人工島が分散しているという地域的な構造の共通性から、アシ地域に一般的に指摘できるものと推定される。先に述べたような、20世紀を通じたアシ地域における人工島居住の拡大はまさしく、個別の人工島のこうした反復的な分立を通じて進展してきたものと考えられ、しかもそうした過程は今日なお進行しつつあると言える。

重要なのはまた、人工島群のこうした形成過程が、同時に「アシ」という集団的同一性——ただしあくまで境界のゆるやかな——の形成過程でもあるという点である。というのも、基本的事実として、今日「アシ」と呼ばれる人々は、自分たちはもともと「山の民」(トロ)としてマライタ島の内陸山地部の各地に居住していたのだが、それぞれの父系出自集団の祖先が、異なる時期にさまざまな経路で移住を繰り返した後にマライタ島北東部に到達し、海上に住まうようになったという認識を一般的に共有している。こうした認識は、マライタ島の他集団の人々によってと同様、研究者たちにも基本的に共有されており (Maranda & Kōngās Maranda 1970: 832、Keesing 1982: 8, 11 など)、ここには、人工島群という居住形態が、こうした移住と集団的同一性の変容——言うなれば「アシ」になること——の過程をまさしく形象化するものであることが示唆されている。

また、このように多様な移住過程を通じての「アシ」という集団的同一性と人工島居住の形成の帰結として、個別の人工島にはしばしば、まったく異なる地域からの移住者の子

孫が共住しているのが見出される。先にも紹介した a 島もそうした例であり、この島には 1970年代後半まで、集団 G と集団 S という 2 つの父系出自集団に属する男性たちとその妻子が主に居住していたのだが、これら 2 つの集団の父系的祖先は、それぞれ現在のマライタ島のクワラエ Kwara'ae 語地域東部とファタレカ Fataleka 語地域西部から、長期に渡る間世代的な移住を経て現在のアシ地域に到達・定着したとされている<sup>11</sup>。

## 7. 個別の人工島の建設過程

なお、「アシ」という集団的同一性の構成と不可分な、こうした移住と海上居住の共有の過程を理解する上では、加えて個別の人工島が建設される具体的な過程を見ることが重要である。動詞的には *'ui(a) fera* と表現される人工島の建設は<sup>12</sup>、具体的には、多くの場合 10メートル四方ほどにもなる巨大な筏 *faoa* を丸太で組み上げ、海底で捨ったり掘り取ったりして集めたサンゴの碎片をその上に積み上げ、そうして建設現場に運んで積み上げるというかたちで行われる。こうした建設作業は男性ひとりで行われることも集団で行われることもあり、一般にごくゆるやかなペースで行われるものと考えられる。

重要なのは、個別の人工島が、その創始者によって短期に、あるいは一世代のうちに「完成」させられるものでは必ずしもなく、むしろ間世代的な増築・拡張の過程を通じて建設され続けるという性格をもっているという事実である。通常、人工島は男性一人あるいは多くても 2～3 人のイニシアティブによって創始されるものとされるが、理念的には、この創始者の息子たちが成長し、まもなく婚姻するという時期になると、息子たちは、自身の婚姻後の新居をその上に建てるために新たな区画——こうした個別区画は「家の場所」*fuli luma* と呼ばれる——を増築するとされる。こうした区画は通常、自身の父が建設し、自らも子ども時代とともに居住していた区画に隣接しそれを拡張するかたちで建設されるが、こうした増築は、さらに次の世代が成人し婚姻する際や、創始者の子孫ではない男性が島に受け入れられて住み始める場合にも行われるべきであるとされる。

こうした事情を踏まえるならば、アシの人々にとっては、既存の人工島から転出した個人による新たな人工島の創設と、個別区画の増築による既存の人工島の拡張とは、一見したほどに異質な事態ではないものとも言える。また、先にも述べたような、反復的な分立を通じたアシの人工島の「増殖」過程は、少なくとも一面において、アシの男性たちにおける、自身の父や祖父、あるいはオジたちが島を造ったのと同じように自分も島を造るという模倣・反復の連鎖によって支えられてきたものと考えられる。こうした視点は、すで

---

<sup>11</sup> こうした祖先の移住過程は、*'ai ni mae* と総称される親族集団の祖先についての伝承のかたちで語り継がれている。アシの移住過程・集団形成とそれに関わる伝承については、日本文化人類学会第44回研究大会（2010年6月12日、於：立教大学新座キャンパス）での研究発表「メラネシア地域における移住の過去と現在——ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民」ラウとその人工島居住の事例に即して」で報告・検討した。

<sup>12</sup> *'ui(a)* は石・岩 *fou* に関わるさまざまな動作を表す動詞であり、「(人などに) 石を投げつける」、あるいは一般に「(ものを) 投げる、投げ捨てる」、「(木の実などを) 石で打ち割る」などと並び、「(*fera* すなわち人工島を) 岩を積み上げて建設する」という意味で用いられる。



に述べたように、この特徴的な居住形態の「起源」のみならず、いったん成立した居住形態を一般化させるそうした模倣・反復の契機に注目することが民族誌的に不可欠であることを示唆している。

## 8. 人工島居住の現在

調査地であるT村沖合の人工島群では、すでに述べたように、主に70年代後半から80年代後半にかけて一定の人口流出が進んだとされるが、その後、a島のようにいったん無人化した島に人が戻る事例も生じており、T村沖合の現状を見る限り、アシ地域の人工島居住は、以前よりも居住人口に関して縮小していながらもある種の「安定状態」にある、すなわち目立った拡大過程にも縮小・衰退過程にもないように見える。

このことはしかし、今日のアシの人々の意識において、本島海岸部や人工島における居住の現状が安定したものであるということを意味しない。同じマライタ島北部のファタレカ語地域の事例に関してすでに報告されているように（宮内 2003）、現在のマライタ島では、人口増による土地不足への不安や、2000年前後のソロモン諸島におけるいわゆる「民族紛争 ethnic tension」を背景に、人々は現在の居住地を離れて親族集団の故地——アシの言語では *'ae fera* ——へと「帰る」べきだ、あるいは近い将来にそうすることを余儀なくされるという意識が広く共有されている。そうした中、先に述べたように自らを他地域からの移住者として規定し、多くの場合、現住地に近接するマライタ島本島海岸部に土地を保有しないアシの人々において、人工島という居住形態と「アシ」という集団的同一性の意味は今日きわめて不安定なものになっている。今後の民族誌的課題はまさしく、こうした状況をも踏まえ、この人々の独特で奥深い居住・移住の歴史と現状について検証することにあると言えるだろう。

### 【謝辞】

本稿は、財団法人トヨタ財団の2007年度研究助成（助成番号：D07-R-0157、研究代表者：里見龍樹、研究題目：「豊かさ」のイメージへの文化人類学的アプローチ——カーゴ・カルト運動とメラネシア地域の現在）の成果の一部である。また、本稿のもととなった日本オセアニア学会第27回研究大会（2010年3月17日、於：名鉄犬山ホテル）での報告に対しては、会員の方々から貴重なご意見、ご教示をいただいた。ここに記して感謝したい。

### 【参考文献】

#### 秋道智彌

1976 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2): 76-131。

**Akimichi, Tomoya**

1991 Sea Tenure and Its Transformation in the Lau of North Malaita. *South Pacific Study* 12(1): 7-22.

**Corris, Peter**

1973 *Passage, Port and Plantation: A History of Solomon Islands Labour Migration, 1870-1914*. Melbourne University Press.

**Fox, Charles E.**

1974 *Lau Dictionary*. Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

**Ivens, Walter G.**

1978 (1930) *The Island Builders of the Pacific*. AMS Press.

**Keesing, Roger M.**

1982 *Kwaio Religion: The Living and the Dead in a Solomon Island Society*. Columbia University Press.

**Keesing, Roger M. and Peter Corris**

1980 *Lightning Meets the West Wind: The Malaita Massacre*. Oxford University Press.

**Köngäs Maranda, Elli**

1970 "Les Femmes Lau, Malaita, Iles Salomon, dans l' espace socialisé. Notes de topographie sociale." *Journal de la société des océanistes* 26: 155-162.

**Laracy, Hugh**

1976 *Marists and Melanesians: A History of Catholic Missions in the Solomon Islands*. University Press of Hawaii.

**Maranda, Pierre**

2001 "Mapping Cultural Transformation through the Canonical Formula: The Pagan versus Christian Ontological Status of Women among the Lau People of Malaita, Solomon Islands." In *The Double Twist: From Ethnography to Morphodynamics*. Pierre Maranda (ed.), pp. 97-120. University of Toronto Press.

**Maranda, Pierre and Elli Köngäs Maranda**

1970 "La Crâne et l'utérus. Deux théorèmes Nord-Malaitans." In *Échanges et communications. Mélanges offerts à Claude Lévi-Strauss à l'occasion de son 60ème anniversaire*. Jean Pouillon and Pierre Maranda (eds.), pp. 829-861. Mouton.

**宮内泰介**

2003 「『自分たちの土地へ』——現代メラネシア社会における移住・民族紛争・土地所有」『現代社会学における歴史と批判 上——グローバル化の社会学』武川正吾・山田信行（編）133-158ページ. 東信堂.

**Parsonson, G. S.**

1966 “Artificial Islands in Melanesia: The Role of Malaria in the Settlement of the Southwest Pacific.” *New Zealand Geographer* 22(1): 1-21.

**Ross, Harold M.**

1973 *Baegu: Social and Ecological Organization in Malaita, Solomon Islands*. University of Illinois Press.

1978 “Baegu Markets, Areal Integration, and Economic Efficiency in Malaita, Solomon Islands.” *Ethnology* 17(2): 119-138.

**Statistics Office**

c.2000 *Reports on 1999 Population and Housing Census*. Statistics Office (Solomon Islands).

**竹川大介**

1995 「ソロモン諸島のイルカ漁——イルカの群れを石で追込む漁撈技術」『動物考古学』4: 1-25.

2002 「結節点地図と領域面地図、メラネシア海洋民の認知地図——ソロモン諸島マライタ島の事例から」『講座・生態人類学5 核としての周辺』松井健（編）159-193ページ. 京都大学学術出版会.

**Tryon, Darrell and Brian Hackman**

1983 “Solomon Islands Languages: An Internal Classification.” *Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies*. Australian National University.